

1927年に「前半部」として出版されたハイデッガーの『存在と時間』は、その第二部において「存在時性という問題点の前段階としてのカントの図式論と時間論」を扱うことを予告していた。その後ハイデッガーはカントの研究に集中したが、しかしその成果は『存在と時間』第二部第一篇としてではなく、単行本『カントと形而上学の問題』（以下、『カント』書と略記する）として、わずか二年後の1929年に公表されるに至った。彼がカント研究をこの時期に単行本として公刊することを決めたということは、少なくともこの時期までに、彼が「後半部」の刊行に何らかの困難を認めていたことをわれわれに予想させよう。このような意味でも『カント』書は、『存在と時間』の思想とその完結の試みを解釈するための、もっとも重要な資料と見なされるべきである。四章から成る『カント』書のはじめの三章は、『純粹理性批判』を中心としたカントのテキストの読解にあてられているが、第四章はこれらカント解釈とハイデッガーの『存在と時間』の思想との関係を述べているとみることができる。だがこの第四章は、ただでさえ難解なハイデッガーの叙述のうちでも、もっとも混乱した印象を与えるテキストのうち一つである。したがって『カント』書のカント解釈は、ハイデッガーの『存在と時間』の思想とどのような関係にあるのか、という問いには明瞭な答えが欠けていると言わざるを得ない。そこで本発表は、1928年夏学期講義「論理学の形而上学的な始元諸根拠：ライプニッツから出発して」（以下「ライプニッツ」講義と略す）にみられる「メタ存在論 (Metontologie)」概念を補助線として用いつつ、この問いへの答えを準備する。

『存在と時間』および1927年夏学期講義「現象学の根本諸問題」を参照することにより、『存在と時間』の完結の試みには次のような二つの主要動機をみてとることができる。すなわち、ア・プ・リ・オ・リ・の・学・の・動・機と自然の存在の動機とである。存在一般の意味への問いは先存在論的存在了解の徹底化であり、〈先学問的了解がそこへと企投しているところのものを、学的・表明的企投によってあらわにすること〉という「学 (Wissenschaft)」の方法によって遂行されるべきものと考えられていた。ア・プ・リ・オ・リ・に与えられているものを開示することである学の方法は、非現存在的存在者の存在を内世界性 (Innerweltlichkeit) に依拠しつつ分析しようとする基本方針と結びついてきたが、この基本方針にはしかしながら次のような難点が指摘されていた。すなわち、自然の存在には内世界性は（本質的な規定としては）属していないのである。したがって、内世界的存在者の存在を分析する方法によっては、自然の存在を含めた非現存在的存在者の存在の全容を明らかにすることはできないのである。

この、相互に対立する二つの契機は「ライプニッツ」講義における基礎存在論とメタ存在論の概念に対応しよう。この両者は「それらの統一において形而上学の問題を形成して

いる」と語られている。基礎存在論が第一次的には現存在の企投に依拠する分析であるとするれば、メタ存在論は被投性に依拠する分析であり、〈内世界的存在者のすべてを包括する先存在論的理解〉とは異なる仕方で非現存在的存在者に接近する方法である。この問題系は「全体における存在者」の問題および、「現存在の有限性」の問題を含んでいる。

以上の解釈が正しいとすれば、われわれは『カント』書における次のハイデッガーの問いのうちに、〈基礎存在論とメタ存在論として一旦はばらばらに分析されようとしていた現存在の超越の運動の二側面を、統一的な事象のうちに捉えなおそうとする試み〉を読み取ることができるのではないだろうか。すなわち、「有限な人間の現存在は、その存在者を単に人間の現存在が自分で創ったのではないだけでなく、それ自身現存在として実存しうるためには現存在自身がそれに依存してさえいるような存在者を、いかにしてあらかじめ超出（超越）することができるのだろうか」。ハイデッガーはまさにこの問いをカントの『純粹理性批判』の中心の問いとして解し、「超越論的綜合、すなわち超越を形成する綜合の問題」と呼んでいるのである。

ハイデッガーはカントが直観を基礎として認識を捉えていたことに「有限性」の問題への理解を見、また彼の〈アプリアリな綜合判断はいかにして可能であるか〉という問いを、すべての存在者的了解に先行する存在了解を明らかにするという基礎存在論的課題として解釈する。そして、彼がカントの問いへの答えとして見出すに至るのは「本質的に自発的受容性でありかつ受容的自発性である超越論的構想力」と、これを可能にする「根源的時間」なのである。